
死神と姫君

小田マキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神と姫君

【Nコード】

N7575L

【作者名】

小田マキ

【あらすじ】

凄惨な戦乱から二十年、かつて地上を震撼させた稀代の死神デイズ・リーリングことリン・フォルラーツは生きる目的を見失っていた。

ほんの気紛れで訪れたクラウディア帝国跡地で、銀の髪と漆黒の瞳を持つ少女と出逢い、彼の止まっていた時間は再び緩やかに流れ始めた……。

登場人物紹介（前書き）

この作品は、当方オリジナル・ファンタジー小説『蒼穹の孤独』の
二十年後のお話です。単独でも十分読めます。

登場人物紹介

> i 8 1 2 7 — 9 6 9 <

< 漆国アイリス >

リン・フォルラーツ：58歳

かつて白き死神イシュトレイグと契約を交わし、ディゾ・リーリングと名乗っていた。戦争中はお世辞にも善人とは言えない血塗られた所業に手を染めていたが、サエに出逢ってから改心。彼女を守って果てる。

戦争終結後、白き死神の計らいで蘇ってから精霊と人間の間のような身体になり、ほぼ年を取らなくなった。生きる目的を見つける為にイシュトレイグと旅に出て、偶然立ち寄ったクラウディア帝国跡地でフォルと出逢う。

< 翔国オルガйм >

フォルセリーヌ・ロシュフォースト：18歳

通称フォル。親子仲は良いものの、二十年前に起こった戦争を治めた英雄二人の娘と言うことにコンプレックスを感じている。王宮に飾られていたディゾ・リーリングの肖像画を毎日見ている内に、恋心を抱くように。

城を抜け出し、クラウディア帝国跡地に入りししていたことから、偶然リンと出逢う。

サエ・サスキア・ロシュフォースト：40歳

通称サエ。二十年前、十年にも及ぶ戦乱を治めたとして世界エリアスルートの救世主と呼ばれている。オルガйм復興後、アルフレ

インと結婚して王妃となる。実質、オルガイムの最高権力者。いつまで経っても落ち着かない国王に代わり、法整備や他国との外交復活に多忙な日々を送る。美しい容貌は今も変わらず、王の不在時に寝室に忍んで来る侍女達に気苦労が絶えない。

一人娘のフォルと、ラインの仲を取り持とうとして何かと策を講じる。

アルフクレイダイン・ロシュフォースト三世：43歳

通称アルフレイン。二十年前の戦争中に出逢ったサエの才気に惚れ込み、ともに戦った英雄の一人。故郷オルガイム復興後に国王となり、彼女と結婚。有能な王妃に政務を任せて頻繁に国外視察に出掛けている。国王になってもいい年をして落ち着きがなく、一人娘のフォルを過度に甘やかす駄目親父。

その為、結婚前同様に王妃には全く頭が上がらない。

凄惨な戦争の爪痕を緑に隠された彼の跡地に、一人のアイリス人が立ち尽くしていた。それは、かつての戦乱時に地上の国々を震撼させた稀代の死神デイズ・リーリングその人であり、今はリイン・フォルラーツと本来の名を名乗っていた。

血で血を洗う面影は長い年月の間に風化し、その存在ももはや歴史の闇に葬り去られ掛けているが、不器用な自分は簡単に生き方も考え方も変えられないでいる。唯一の肉親である母を看取って一年彼は今まさに人生の岐路に立っており、これからどう生きて行くかを考えていた……遠い昔に手放した筈の人生は、この遺跡と同じようにいまだ時の針を止めたままだ。

『……今度こそ、自分の為に生きなさい』

黄泉路へ旅立つ前、母が自分に掛けた言葉だ。

クラウドディアによって一時的にその生を断ち切られていた母には、死神と契約を交わした息子がどんな十年を過ごしていたかは知りようがない。それでも生前より言葉数の少ない彼の心を読むことに長けていた彼女は、時の隔たりの為だけではなく、凄惨な過去が植え付けた払い切れない心の闇を察していたのだろう。

かつての生活を取り戻せば、何かが変わると思っていた。

生家の花屋を手伝い、武器から農具に持ち替え、血で染まっていた手は土に塗れた……花を愛で、生命を育てることに充足感を覚えていた。その成長に母や隣人達と笑みを交わすこともあった。

このまま緩やかで起伏のない平和な生活を続けるのだと思っていたのに、母を失った自分には、結局何も残っていなかったのだ。

封印した筈のかつての白き死神イシュトレイグの剣をその手に取った瞬間、時計の針は再び巻き戻された……自分の身体は蘇った時のまま、進んだ時はまやかしかった。母を見送るまで、自分の心ごと偽っていただけだったのだ。

『……貴方は難しく考え過ぎだ』

精霊に身を堕としたイシュトレイグは、以前と同じ調子で彼に話し掛ける。元来精霊は実体のない存在なのだが、最高位の死神であった彼の力は大幅に削がれているとは言え、やはりその比ではなく、外見上は以前と変わらぬ剣の姿を取り、リインの腰に提げられている。

「難しくも何も、どうすればいいのか分からんのでは、考えようがないだろう」

投げやりに応えながら、リインは溜め息を吐く。

不安や恐怖を感じている訳ではなかった……老いない身体を不審がられぬよう窺うことは、今では呼吸をするのと同じくらい自然な

ことだ。

今の心境を言い表すとしたら、ただ途方に暮れていると言っしかない。

復讐の念を手放し、母も看取った。次は、それこそ母の遺言通り自分の為に生きるべきだと言うことは分かっている。せつかく取り戻した命、今更死にたい訳でもないのだし。

それでも何をしたらいいか分からなくて、生家の店を母の代から親しくしていた隣人に任せ、イシュトレイグを連れて旅に出ることにした……唯一の肉親である母を亡くした傷心の旅と大仰に心配されたが、否定するのも甚だ親不孝かとそのままにした。

意識した訳ではなかったが、結局この足が向いたのは全ての終焉と始まりの地……クラウドディア帝国跡地だった。

『私の存在も邪魔なら、ただの剣となって暫く眠っているが？』

「変な遠慮はしなくていい」

自分を生かす為に神の座まで捨て、契約が破綻した今も側にいてくれることには随分感謝をしている。彼は自分にとって、まさに空気のような存在だった。

『恋でもしたら、世界も変わるだろう』

「……また妙なことを言い出したものだな」

からかい口調でなかったことから怒りこそ湧かなかったが、突拍

子もない言葉にリインは眉間に小さな皺を刻む。

脳裏に、ある面影が過ぎる……捨て去ったと思っていた自分の心に火を付け、復讐よりも強烈にその存在を焼き付けて行った彼女。

「それこそ不可能だろう、サエに出逢った後では」

彼女の噂は、その身に流れる半分の同胞の血のお陰でアイリスにも届いていた……世界を救った救世主は麗しのオルガム国王妃となった後も、自分とも馴染み深い国王とともにそれまでの閉鎖的だった国政改革に忙しい日々を送っているらしい。噂一つとっても、今も変わらずまっすぐな心根が伺い知れた。

『確か、娘が生まれたらしいな……せつかくの名付け親の名誉を、貴方は断ってしまったが』

「よせ、縁起でもない。かつて死神を名乗っていた人間にそんなもの頼む奴らも悪趣味だ」

あれから十八年……旧友達の娘の成長した姿を何とは思いつくとしたが、あまりにも個性の強過ぎる両親二人の容貌に巧く想像出来ず、疲れたような溜め息が漏れる。

「……っ、……え、嘘おっ！　ちよつとそこっ、どいて……
……っ！」

イシュトレイグとの会話と、つらつら思い出される過去の世界に意識を向けていたリインは、突如降って来た甲高い叫び声にギョッとして頭上を見上げる。

恐るべき速度で迫り来るものに咄嗟に両腕を広げた直後、彼に腕に生半可ではない重力が掛かった。

「……っ……いたたっ……」

「……それは、こちらの台詞だ」

腕の中に納まった人物の体重自体は軽い部類に入るだろうが、高所から急速落下した所為の重力付加で受け止めた側は堪ったものではない。長く戦いから離れていたことでやや鈍っていた身体が軋み、リインは眉を顰めた。

「自殺なら他所でやれ、この地は禁域だ」

「自殺なんて冗談じゃないわ！ 大体、貴方の所為よっ、何で勝手に入り込んでるのよ！ びっくりして足を踏み外しちゃったじゃないっ！」

諫めた言葉に、猛烈な反論が返る……命の恩人相手に向かって、随分な喧嘩腰である。

口達者な娘だが、二十歳には満つまい。機動性を重視した少年用らしい旅装束は上着の留め具が釦ではなく組み紐の飾り結びになっていることから、オルガイム人であることが知れた。同じく翡翠や

瑪瑙のような光沢を抑えた輝石の玉を通した組み紐で長い銀髪を纏めており、盛大に顰められた眉の下の円らな瞳はまるで黒曜石のように煌めいている。

リインは軽い眩暈を覚えた。もちろんそれは、さきほど受けた重力の衝撃の所為ではない。

「……何をやっているんだ、仮にもオルガイムの王女がこんなところで！」

アイリスとオルガイムの混血児は、自分の知る限り彼女とその娘しか知らない。

さきほどまで話題にしていた旧友の一人娘の登場に、リインは苦虫を噛み潰したような渋面を刻む。

「……うるっさいわね！ 見ず知らずのオジサンに説教される筋合いなんでないわ、そんなことより王女って分かったならさっさと降りなさいよっ！」

無礼者！……そう悪びれもせず気色ばむ少女は、あまりにも賢くない。正体の分からぬ相手に自分の素性が知られた状況下のこの高圧的態度、危機感のなさにリインは更に頭痛を覚えた。

「誰に似たんだ、このはねっ返りはっ……アルフレインの方がまだ落ち着きがあつたぞ」

「……っ！ お父様に対して、何て馴れ馴れしいのっ？ それに誰がはねっ返りですってっ……！」

「本当に騒々しい……仕方ない、オルガイムまで送って行ってやる。随分な貧乏くじを引いてしまった」

キャンキャンと子犬のように吠える王女を腕に抱いたまま、リインは苛立ちを視界とともに瞼の中に閉じ込める。

『そう悲観したものでもない、これで久々にサエ達に逢う口実が出来ただろう？』

そんな彼に、イシュトレイグがおかしそうな口調で投げ掛ける。

「……えっ？ 今の声、何っ？」

少女だけが突然した第三者の声に、辺りをキョロキョロと見回していた。

「少しの間大人しくしてろ」

リンが言葉を終えた途端、彼らを中心に旋風が起こる。

「えっ、ええええー！ー！ー！ーっ！」

「……喋るな、舌嚙むぞ」

旋風とともにグルグルと回る周囲の景色に声を上げる彼女に、リンはいい加減うんざりだと言いたげな様相で溜め息を吐いた。

翔国オルガウムが王城クラウドス・ディアでは、とある騒動が起こっていた。

国外視察で不在な国王と彼に代わって政務中の王妃の監視の隙を突き、王女フォルセリーヌがまた城を抜け出したのだ。

「……レジストールなんて、買ってやるんじゃないかな」

執務室で膨大な書類の乗った執務机に肘突く四十を過ぎてもまだまだ若々しい王妃は、王女付きの侍女より報告を受け、美しい漆黒

の双眸をきつく歪めていた。

「申し訳ございませんっ、王妃様！ 私が目を離れたばかりにっ……」

報告に来た侍女は最近王女付きになったばかり……己の失態に蒼白となり、泣き出さんばかりに動揺している。

「今回のことは私達親の責任だ……ティアは悪くないんだよ、泣かないで」

王妃は席を立ち上がって小刻みに震える彼女ティアの前までやって来ると、蒼褪めた頬に流れ落ちた涙を拭ってやる……少し困ったような微笑みもやや抑えられた声も、甘やかで罪深いほどに美しいティアの潤んだ瞳は、見る間に熱に浮かされたようなうつとりとしたものになる。

「行き先も分かるしね、すぐに迎えに行って来るよ」

「王妃様自らですかっ……？」

続いて告げられた言葉に、ティアは信じられないと瞳を見開く。

「あれだけの飛び石について行けるのは、国王が私ぐらいだからね」

レジストール……通称飛び石と呼ばれる魔力を持つ翡翠のごとく深い緑の輝石は、有翼の民オルガイムの間で飛行速度を上げる加速装置として広く使われていた。

去年の王女の誕生日にせがまれ、一人娘に甘い国王アルフクレイ

ダインが贈ったそれは最上ランクの一级品……二足歩行時でもその威力は遺憾なく発揮される。宝石としても美しいそれを髪飾りに細工していつも身に付けるようになったものの、フォルセリー又は敢えてその使用を控えていた。自分への監視が緩むのを待ち、城を抜け出す機会を虎視眈々と窺っていたのだ。

鮮やかに微笑んで言った彼女は、壁に飾るように掛けられていた白銀の剣をその腰に帯びる……降ろしていた髪を紐で縛り、ズボンの上の巻きスカートを落として肩に引っ掛けていたスカーフをフードのように目深に被ると、簡易な旅装束が完成する。

「……すぐ連れ戻してくるから、他の人間にはフォルと私のことはまだ黙ってて」

「サスキア様っ……！」

執務机の背の窓を開けて窓枠に足を掛けた王妃に、ティアは叫び声を上げる。振り返った彼女は動じた風もなく口角を上げた口許に、静かに、と人差し指を当てると、それ以上止める間を与えず飛び立っていった。ティアが開け放たれた窓辺に到達した時には、既にその姿は城壁を越えて遙か彼方……遠目には陽の光を浴びて輝く白い翼と揃えたような旅装束に、その姿は大空を羽ばたく鳥のようにしか見えなくなっていた。

一方、リインと王女フォルセリー又は、かつて砂漠であったキルギスを抜けた先の輝石の大地に立っていた。自分を見上げたまま固まっている腕の中のフォルセリー又を地面に降ろすと、リインは広

範囲に渡りエクシミリオンで覆われた大地に目を向ける。

先の戦乱の爪痕は、こんなところにも残っている……クラウド、ア帝国のサクリファのエネルギー放射により一撃で滅んだ翔国オルガイム。せめてもの抵抗に当時の国王は自分達ごと王城クラウド・ディアを永業石エクシミリオンで覆い、破壊を免れた。改心したクラウド、ディア皇帝によって奪われた命が戻された折り、それも取り払われはしたのだが、城内にいた国王始め殉死者達が還って来ることはなかった。サクリファの熱で溶かされたエクシミリオンだけが、オルガイム国土を取り囲むように周囲の大地に吸収され、鉱物化してしまっただ。

痛ましいと当初は周囲の国々から同情を集めていたが、現国王と王妃はそれを国家の為に活用することを考えた。大地が陽光を集める性質を持ったことから、そこで得た光、熱、動力を生活に役立つ資源に鉱物変換させることに成功する……それは今までにない高濃度な鉱物燃料として他国へも輸出され、閉ざされていた国交が復活することになり、蘇ったばかりの翔国オルガイムはエリアスルートでも有数の富国となった。

時代の闇に取り残された自分と違い、かつての旧友達は自分達の手で未来を切り開き、着実に前に進んでいる……その背は、もうこの目には映らない遥か彼方だ。

「後は自分の足で歩いて帰れるだろう」

僅かな逡巡の後、リインは呆けたように自身に視線を注ぎ続けているフォルセリーヌに呼び掛ける。

「……うつ、そだ……っ、……オジサン、その顔っ……」

湿り気を失った唇からは、驚愕に塗れた言葉が紡がれる。

『……急に力を使うからだ、元に戻っているのだよ』

更に腰に帯びたイシュトレイグの言葉に、リインは咄嗟に顔の前に手を上げる……二十年の時の打刻はすっかり消えていた。

しまった……リインは、張りの戻った顔を盛大に顰めた。

「……それも、死神の剣っ……、貴方……ディゾ、リーリングっ……?」

彼女の口から語られた、かつての呪わしき異名。

「両親から聞いていたか……まあ、関わり合いのないことだ。忘れる」

自分の正体を見抜いたことに多少驚くが、彼はそう言って当初の予定通りフォルセリーヌの前から踵を返す。

「待ってっ!」

数歩も歩まぬ内に、リインは彼女に腕を引かれる。

「……何だ、一体」

「何で? ここまで来たのに、お母様やお父様と会って行かない気っ? お母様は貴方のことを大切なお友達だから、ずっと会いたいつてっ……!」

王妃サスキアは、自分のことを大層好意的に娘に話していたらしい…… 実に彼女らしいことだが。

「……私は過去の人間だ」

「えっ……？」

フォルセリー又は、リインの言葉が理解出来ないと云うように瞠目する。

「……それって、どう言うこと？ 貴方は、お母様やお父様に会いたくないのっ？」

「彼らも多忙だろう」

旧友だと言う認識があるのだから、もちろん会いたくない訳ではない。ただ、会いたくて堪らないかと聞かれれば、否と答えるだろう。戦いを介さぬ平和な今、彼らに会ってどんな顔をすればいいのか分からない…… 今を生きる彼らと何も変わっていない自分では、あまりにも隔たりがある。

「あまりあの二人を困らせるようなことをするな」

その言葉に、フォルセリー又は真っ赤になって恥じ入るように俯いた…… しかし、リインの腕を掴む手を放すことはしない。

「いい加減、放せ」

「嫌よっ、こんな一方的なのって…… あんまりだわ！」

「……何なんだ、一体」

彼女が何故ここまで自分を引き止めようとするのか、リインにはまるで見当がつかなかった。

「……フォルつ、見つけた!」

どう対応すべきか考えあぐねていたところ、またしても頭上から第三者の鋭い声が降ってくる……ただ、その声音はいくら時が経とうとも忘れられるような代物ではなかった。

「……っ、お母さまっ?」

フォルセリーヌはギョツとして空を仰ぐ。

遙か上空を飛翔していた影は、急速に二人の元へ降下して来た。

「……本当にしようのない子だな、フォルセリーヌ」

「どうしてっ……!」

「お前にあげたレジストールは双子石なんだよ、片方は私が持つてる……フォルが一筋縄じゃないのは分かってたからね」

もともと一つだった魔導石を二つに割ったそれぞれは双子石と呼ばれ、互いに引き合う不思議な縁が生まれる。それは、離れて暮らしていてなかなか会えない家族や恋人に持たせる慣例があり、贈り物としてはとても人気が高い物である。聡明な母をまんまと出し抜いたと思っていたフォルセリー又だったが、彼女の方が一枚上手だった。

「……ところで、随分懐かしい顔だな」

彼女は、娘がその腕を拘束しているリインに視線を移した。突然の再会、そして全く容姿の変わっていない彼にも何故か取り乱した様子は見られなかった。

「……久しぶりだな、サエ」

「全くだ。ファルカスとフェダの婚礼にも来なかったし、随分水臭いじゃないか」

諦めたようにそう言った彼に、サスキア王妃ことサエはやや咎めるように言葉を続けた。

「だから、元死神だった人間をそう言う祝いの席に呼ぶな。縁起の悪い」

リインはうんざりと言うような溜め息を吐き出した。

「何言ってるんだ、ファルカスはあんたに一番祝福してもらいたかったんだぞ……薄情な。今回は、絶対に逃がさないからな」

「私はただ偶然出くわした家出娘を送り届けたただけだ」

「今までの埋め合わせだ、礼ぐらいさせろ。あんたがうんと言ってくれないと、城には戻れない」

「……何なんだ、お前まで」

彼は全く引かない母子に眉根を寄せる。

「アルフレインも留守にしてるし、私の不在まで知れば、不平分子に謀反を起こされる可能性があるぞ……オルガムもまだ一枚岩とは行かないからな。今この瞬間にも城を落とされているかもしれない、あんたは私達親子を路頭に迷わすつもりか？」

とんでもないことを、とびきりの笑顔で言つてのける。

「脅す気か……」

「あんたの出方次第だな。二十年も連絡寄越さなかったんだ、いくら温和な私だつてさすがに怒るぞ」

笑顔が空恐ろしく感じられるのは、果たして自分の気の所為だろうか……。

「……長居はしないからな」

「決まったな。さつさと帰ろう……フォル、後でゆっくり説教だからな」

「ええっ！ 嫌だあつ……」

二人のやり取りを呆気にとられて見ていたフォルセリー又は、母の言葉に悲痛な声を上げる。そんな相変わらぬ姿を目の当たりにしたリインも、久しぶりの敗北感を噛み締めていた……今も昔も彼女にだけは敵わない。

翔国オルガムが王城クラウドス・ディアは、先の騒動の終結とともに訪れた更なる波乱の予感にさざめいていた。

それは、執務室で政務をしていた筈の王妃が、同じく自室で勉強中の筈の王女とともに一人の珍客を伴って城門をくぐったことを発端としていた。

「……ま、楽にしてくれ」

自室付きの侍女に人数分のお茶を頼み、サスキアはリインとフォルセリーヌに部屋中央に鎮座した応接セットへの着席を勧める。リインは従いながら、戸口で棒立ちになっているフォルセリーヌを怪訝そうに一瞥した。

「お母様、私は……」

その視線に、彼女は頬を薄く染め抜く。

「いいからおいで、リインに失礼だ」

正面のスプリングの良く利いた革張りの小椅子に腰掛けながら、同席を躊躇っている様子の王女に、母は綺麗な笑みで圧力を掛ける。シユンとした様子でサスキアの右隣の席に着く様子は痛々しげで、よほど王妃の叱責が恐ろしいのか、とリインは納得する。

「世話になったんだから、彼に礼の一つぐらい言いなさい」

「……私はそんな大層なことはしていない」

ここまで送り届けたのは結局自分の意思であり、フォルセリーヌの感情は関係ないし、礼を求めていることではなかった。何より、出逢った時のねっ返り具合からこの委縮に、少々気の毒に感じてその口を開いた。

「いえ、でも……生意気なことを言っでごめんなさい。最初は貴方だって、気付かなくて」

「……いや、よく気付いたな」

すっかり殊勝な様子の彼女の謝罪に、リインは何とはなしに返す。

「アルフレインの執務室の前に、あんたの肖像画を掛けているからな。ユーシスさんに作ってもらったからかなり良い出来なんだ、鬼気まで伝わってくる……ファルカスの屋敷にも同じのがあるぞ」

「……何だ、その手配書のような扱いは」

預かり知らぬところで己の顔が晒しもののような扱いをされていたことに、リインは顔を顰めるが……。

「みんな、リインを家族のように想ってるんだよ。家族の肖像を家に飾って何が悪い？ 大体、二十年間何の連絡も寄越さなかった奴につべこべ言う資格はない」

次の台詞には何の反論も出来なかった。非難はもつともであり、家族と言う言葉は、現在天涯孤独となってしまうた身の上に染み入るように温かった。

「元死神だったからとかどうとか、あんたは深く考え過ぎなんだよ」

『……………実に同感だ』

それまで黙り込んでいたイシュトレイグが、サスキアの言葉に息を吹き返したように同調する。

「……………白き死神っ、いや……………イシュトレイグだったか。精霊になって喋らなくなったのかと思った」

かつての死神の剣に視線を落とした彼女は、驚いたように言った。

『外では用心に越したことはないと思ってね』

「ああ、確かに……………しかし、今更その姿で気付く人間なんていないだろう」

戦争後、ディゾ・リーリングがリン・フォルラーツとして蘇っていることは、オルガイムとガルシュの国王夫妻、そして、ファルカスとフェダしか知り得ない情報であり、元最高位の破壊神であった存在が今もただ一人の人間と行動をとみにしていると言うことはまだ知られていない。平和な世の中になったとは言え、良からぬことを考える人間は後を絶たない……………彼の存在は、簡単に新たな戦争

の火種になり得るのだ。

リインがサスキア達と連絡を絶っていた理由の一因であった。本来の色素と両目の視力を取り戻し、その姿もただのアイリス人として偽りの時を刻んでいたものの、情報は何処から漏れるとも知れないのだ。地位も名誉も金にも興味はない、望んでいるのは永久に平和な世……戦争など、もううんざりだ。歴史の表舞台からディゾ・リーリングの名が消えるまで、自分の生存を知られる訳にはいかない。

「そんなことはない。こちらの油断もあったが、フォルセリーヌには一目で見破られている……悪趣味な死神の肖像画など、外してくれ」

「却下、気に入ってるんだ。あと、この子は特別だよ。あんたの顔を見間違っ箒がない」

「ちよつとつ、お母様……！」

笑気を含んだ彼女の言葉に、フォルセリーヌは真っ赤になって次の言葉を遮ろうとする。

『……ああ、そう言うことか』

その様子にリインは意味が分からないと言った顔をしていたが、腰に帯びた声は得心がいったと言う調子だった。

「流石に本人よりも察しがいいな、イシュトレイグ」

「……どう言うことだ？」

フォルセリーヌの上気した顔を目の端に捉えながら、当の本人を差し置いてやり取りをする二人の様子に彼の苛立ちは募る。

「そんな睨むな、フォル。可愛い顔が台無しだよ……さて、そんなことよりも、リイン」

「そんなことって……！」

話題が逸れたことは有り難いが、それ以上に蔑ろにするような口調の方が彼女にとってはショックだったようだ。他者の心の機微に疎い訳でも悪意がある訳でもないのだが、サスキアは時折他者の激情を誘う言動をとることがある……それは後々になって必要なことだったと理解するも、当時はどうしても憤りを覚えるものだった。それも彼女の魅力の一部だったが、振り回されるフォルセリーヌの姿は第三者の目にはやはり気の毒に映った。

「……もつつ、知らない！」

美しいが少々意地悪な笑みを向ける母に、彼女は我慢出来ないと言うように席を立つ。

「やり過ぎたか、暫く口を利いてもらえないな。……有難う、後はこっちでやるよ」

乱暴に扉を開けて出て行った娘を追って……と言う訳ではなく、単に扉の向こうで王女とかち合い、立ち往生していた侍女から茶器の乗ったトレイを受け取って、彼女はテーブルに戻る。

「……彼女に同情してきた」

勝手に城を抜け出した無鉄砲なフォルセリーヌを庇うつもりはさらさらないが、すっかり母に手玉に取られている様子を見せつけられると少々哀れに感じられた。

「そうか、じゃあ話は早いな。滞在中に一つ頼まれてくれないか？」

リンの前に澄んだ琥珀色の液体の入ったカップを置きながら、サスキアは何の動揺もなく話を進める。

「……内容にもよるが」

二十年振りに再会した彼女の依頼なら、無条件に受けたい気持ちはあった……ただ、時を経て更に感情の読めなくなったその笑顔からは、何も窺うことは出来ない。

「フォルセリーヌと婚約して欲しい」

美しい唇が紡ぎ出した言葉は、自分にとってあまりにも衝撃的だった。

一体、何の嫌がらせだ？

かつての想い人の落とした爆弾発言に、リィンは暫し固まる。

彼女にまだ想いがある訳ではない。ましてや、フォルセリーヌがどうこう言う問題でもない……問題は、その申し出が常識的か否か。

そして、目の前の謎めいた微笑みを観察してみるも、二十年の時を経たそれを読み解くことは更に難解になっていた。

「冗談にしては、馬鹿馬鹿し過ぎるな」

「ああ、冗談じゃないからな」

サスキアの声音にはからかいは何も含まれない。

「……では、他に目的があつてのことか」

伊達や酔狂でそんなことを言い出すほど彼女の立場は暇ではない。

「正解……まあ、本気にとつてくれないとは思ったが。確かに、頼みたいのは偽装婚約だよ」

彼女の瞳の中をほんの一瞬過つた影に、リィンは眉を顰める。そ

れに含まれる感情に、自分は見覚えがあった。

「ある事件の首謀者を炙り出したい……鬼畜にも劣る下衆の極みだが、小賢しくてな。十四年も追っているが全く尻尾を出さない」

周囲の温度がずっと冷え込むような粟立つ危機感がその場を支配する。瞳の中に現れては消える微かな苛立ちを含んだその鋭利な光は、サスキアには酷く不釣り合いで、過去にはあり得なかったものだ。

「時効はあと一年……正当に裁くことが出来なければ、きっと私怨が理性を凌駕する」

かつて彼女の存在によって昇華され、自分が決別を誓ったその名は……『憎悪』だった。

新たな鉱物燃料の開発、それによって諸外国との外交復活を果たした現在の翔国オルガイムは今現在、過去に類を見ない繁栄を築いている。

二十年前、蘇った祖国の王となったアルフレインとサスキアは、凄惨な戦乱が残した心の傷を国民から取り除くことから始めた。国土を取り囲むエクシミリオンに覆われた大地を悪夢の象徴ではなく、新たな未来を築く礎に変える……技師や魔術師、錬金術師達と、あらゆる分野の専門家に何か生み出せないかと調査させ、辿りついたのが太陽光を搾取して生成した鉱物燃料。戦火の痕は生まれ変わり、過去の惨劇に囚われていた国民の心には確かな未来が映るようにな

った。

改革はそれだけに留まらず、戦乱が起こる遙か以前から続いていた鎖国を解こうと動いた。旧体制の象徴である先王の時代からの重臣達が構成する審議院はそれに苛烈に反対したが、二人は決してその意志を曲げなかった。

「大臣や一部の貴族達だけじゃなく、国中の者の考えを聞いて回った。孤立は、第二のクラウディアを生む……世界に背を向け続けていても、差別はなくなるらない」

アルフレインの在位から二年、二人の間にはフォルセリーヌが誕生する。王女の誕生に国中が湧き、祝賀祭が開かれた。

王城クラウス・ディアの広間に集まった民衆に向け、王女を抱いたサスキアはバルコニーに立った……祝福への謝意と、子供達の為に開けた未来を与えたいと訴える為に。彼女の想いは彼らに届き、言葉を聞き入れてくれた。

開国への民意は集まり、そうなれば改革に批判的な審議院もその声を押し留めることは不可能だった。

復興四年目にしてようやく解かれた旧体制の鎖、第一の相手国はもちろん魔法大国ガルシュである。同盟条約の締結式で実現した女王メヴィナとその夫となった宰相ユースとの再会は、四人の悲願だった……あれほど誇らしかったことはない。

「その二年後に実現したのは、さすがに知っているだろうがアイリスとの国交だ。私のもう一つの故郷……花と緑の溢れた美しい国だったな。あんたに会えなかったのは公の訪問だったから仕方なかったな。」

だが、まさかそれから更に十四年も会えないとは思わなかった」

サスキアの口調が多少非難めいたものになったが、それはすぐに流された。

「全てが巧くいった、その頃には審議院も随分大人しくなっていた……だから、油断した」

それまで誇らしげだった表情が曇り、口調からも感情が削ぎ落されていく。

「アイリスから戻ると、城内からフォルセリーヌの姿が消えていた……置き手紙を残して」

――誇りを捨てた売国奴に、血の償いを……憂国の士。

「憂国の士、……旧体制を引きずる者だな」

「頭の悪いやり方だった……ただ、私もすぐには冷静になれなかった」

翌朝、続け様に城に届けられた代物は、彼女から最後の理性を奪った。

「……風切羽だった、ちょうど二歳くらいのオルガイムの子供の」

その言葉の持つ衝撃に、リインは瞠目する。

同時に、フォルセリーヌとの初対面の状況を思い出す。不注意で高所から落下した彼女はあの時、飛ばなかったのではなく、飛べなかったのだ。リインが偶然居合わせなければ、その身体を受け止めてやらなければ……彼女は死んでいたのだ。

綱渡りのような危うい巡り合わせだったことに、指先から熱が引いていく。

「手紙の運搬経路を辿って場所を突き止め、即座に乗り込んだ……何かの間違いであって欲しいと思っていたけど、見つけたフォルの翼から風切羽はなくなっていた」

「羽は生え換わるのだろうか？」

彼女の暗い顔を見れば、残酷な問いであることは分かっていたが、リインはそう尋ねずにはいらなかった。

「まだ身体が出来上がっていない状態で骨まで決るようにして切り取られてたんだぞ、宮廷医からは命が無事だっただけでも奇跡だと言われたよ……あの子は飛ぶことを知らないまま、それを永久に奪われたんだ」

言葉は淡々と語られていたが、僅かに細められた双眸にはさきほどから翳りのある鋭い光が見え隠れしている。

「首謀者は？」

「その場にいた者は全て荒くれ者や傭兵達だ、城の最奥まで侵入す

るには誰かの手引きがいる……全て私の所為だ」

サスキアは己の手に視線を落とし、自嘲めいた笑みを口許に刻んだ。

「今でも肉を切り裂く感触がこの手から消えない……誰の死も見たくないなんて、その時は思えなかった」

かつての戦争中、何の躊躇いもなく口にしていた言葉。

母としての深い愛情……それが、彼女の手を血で染めさせた。

「結局、私は何の成長もしていなかったんだ。アルフレインは止めようとしたのに……生かして雇い主を追求することも出来た。あの時、ほんの少しでも冷静になれていたら、フオルをそんな目に合わせた奴をここまで長らえさせないで捕えることが出来ていたんだ」

「お前は悪くない」

母の愛を、誰が責めることが出来ようか。

「あの子もそう言う。謝る度に、あの子の強さを思い知る……勝気に振舞うのも、自分は大丈夫だと周りを気遣つてのことだ。そんな優しいフオルを傷付けた輩が、今も少くない権力を手にしたままのうのうとしているなんて、絶対に許されない」

「首謀者の目星はついているようだな」

深い自責の念に沈みそうになっているサスキアに、リインがその先を促すように言う。

「もちろんだ、だから協力して欲しい」

「暗殺なら腐るほどやって来たことだ……闇に葬り去るのは簡単、痕跡は残さない」

「違う、私がしたいのは私情の復讐ではなく公での断罪だ。国家の最高権力者が道を誤る訳には……いや、人として自分の発言を裏切る訳にはかない。しかるべき裁きに掛け、罪を償わせる」

彼女はきっぱりと言い切った、その瞳に迷いはない。

「……そうか」

望むなら、かつての自分に立ち戻ることも厭わない……そんな覚悟も秘めた問い掛けに対する答えに、リインは笑みを浮かべる。

彼女は強い、そのまっすぐな心根も少しも歪んではいなかった。

「では、私は具体的にどう動けばいい？」

「まずは、フォルセリーヌと偽装婚約してもらおう……もちろん、あなたの身分はこちらで用意したものに一時的に変えてもらうよ。デイズ・リーリングの名は今更出さない。母がアイリスの貴族の出だったようだな、そちらの現当主の奥方とは親しくさせてもらっているから、当主の弟と言うことにさせてもらおう。」

リイン・ダグリードと名乗ってもらおうか……なに、貴族と言っても古くから続く軍人家系で当主のフォーサイス殿も元帥で奥方のブルーデンスも元騎士団所属だったらしいし、それだけの剣技を持

つていても不審がられることはないさ」

「……お前は、本当に未恐ろしい資質を秘めているな」

ダグリード侯爵家……アイリスの剣と呼ばれ、遠縁ながら王家の血筋も引いているアイリス人ならば幼児さえも膝を折る由緒正しい有数の軍人一族である。父はオルガイムの鬼隊長、母はアイリス有数の軍人家系の出……サスキアの身体に流れる剣士の血は、創造神アーケイデイスが救世主として求める資質の全てを面白いほどに満たしていたのだ。

「首謀者は、次期王座を望んでいるということか？」

「正確には、奴の息子だ……親父にのような狡猾さはないが、腐った性根は同じ馬鹿息子だ。何もなくてもあんな愚か者は願い下げだ、奴が王位に就けばオルガイムは確実に滅びる」

形の良い眉を顰め、彼女は吐き捨てる。

「その馬鹿は父親が仕出かしたことを、知っているのか？」

「……ああ、全て知っての上でフォルに求婚して来たよ」

当の王女をあれだけの目に遭わせておいて、今度は王位を得る為に夫の座を要求する……確かに、性根は腐り切っているようだ。

「フォルセリーヌの意思は？」

「あなたとの偽装婚約についてか？ それは何の心配もないよ」

サスキアは、何処か楽しそうな笑みを浮かべる。

『……だろうな』

それまで二人のやり取りの邪魔をしないように黙っていたイシュトレイグも、同意するように口を開く。

「何なんだ、お前達は……」

二人の様子にさきほど感じた疎外感が蘇り、リインは軽く眉根を寄せる。

「その内分るよ……なあ？」

『ああ、いくら心透術に頼りきりで人の機微に鈍くなった貴方でもね』

含むような言葉に、何故かばつの悪くなったリインは、出されたカップに初めて手をつける。

一級品だったろう茶は長いやり取りの中ですっかり冷めてしまい、残念ながらその味も香りも半減していた……。

一方その頃、王妃の私室を飛び出したフォルセリー又は自室で膝を抱えていた。

城を抜け出してクラウディア帝国跡地に向かった時は、堅苦しい監視の目から逃れられた解放感から酷くわくわくしていたのに……あの聡明な母を出し抜いたことが愉快で堪らなかった。

高揚はほんの一時で、今、こんな惨めな気持ちになるなんて思わなかった。

ディゾ・リーリング、人の身ながら最高位の破壊神である白き死神イシュトレイグを御したと言う伝説の人物。

戦いの最中で敵同士でありながら母サスキアを愛し、守る為に存在理由でもあった復讐の念を手放して逝った人。

戦争終結後に蘇るも、再びその名をリイン・フォルラーツと本来のものに戻し、精霊に身を堕としたイシュトレイグとともに新たな争いの火種になることを避けて表舞台からその姿を消した。

彼がいなければ、きっと自分はこの世に生を受けることが出来なかった。大好きな両親にも会うことが出来なかった。

母が語るその人となり、好意を抱くのは簡単だった。

忌まわしい、呪われたと評される戦火を映し込んだような赤い瞳も死神の吐息のような白い髪も……目を瞑ればその細部に渡るまで

鮮明に思い出されるようになった頃、この気持ちは感謝ではなく恋慕であると気付いた。

父の執務室の前に掛けられた肖像画を眺めるだけの一方通行で、逢うことさえ叶わないと言うのに。

「……あんなの、絶対気付かないわよ」

ついさきほどまで目の前にいた彼の人の面影……瞳も髪の色も、母と同じ夜の闇のような色だった。あまつさえ壮年を過ぎた容姿に裏していたリインは、自分が脳裏に焼き付けたディゾ・リーリングの容姿色彩とはまるでかけ離れていたのだから。

「……オジサンって言っちゃった」

膝を抱いていた手で、頭を抱える……二人の初対面は、これ以上ないくらいに最悪だった。

彼は自分のことを、両親を困らせて楽しんでいる我が倅娘だと思っただけだ。実際、はねっ返り呼ばわりされてしまったし、あれだけの醜態を晒して今更弁解は利かないだろう。

今頃、リインは母と何を話しているのだろうか？

自分のことなど、もう忘れてしまっているに違いない。その命を賭して守ったほどの想い人であるサスキアは、四十を超えてなお輝くばかりに美しい……どちらかと言えば父親似を自覚しているフォルセリー又は、母に似なかったことが残念でなかった。

ほんの僅かで良いから似ていてくれれば、彼の心の隅にも自分の

存在を残せたのに。

城を抜け出したりしなければ良かった……こんなことなら、無理に引き留めたりしなければ良かった。

リンへの想いを知っている母のからかうような態度が嫌で逃げ出したのではない。

彼が母に笑顔を向けるのを見なくなかった、それは自分には絶対に向けられることなどないのだから。

「フォル、入ってもいいかな？」

愛する母に対して嫉妬を覚えると言うジレンマに陥っていた耳に、
当の本人の声とともにノックの音が突き刺さる。

ギョツとして、更に間髪置かずに湧き起こった罪悪感で思わず無視を決め込んでしまった。

「……フォル、いるのは分かってるんだよ。心配しなくても今回は説教じゃない、大事な話があるんだ」

暫く返事を待つて、再びノックとともに呼び掛けられる……このまま無視を続けていようか、と一瞬思ったが、そんなことをすればサスキアは何の躊躇いもなく扉を蹴破るだろう。それは一度経験済みだ。扉を粉碎して中に入って来た時の一見優しい母の笑顔は、今でもたまに夢に出てくるほどのトラウマになっている。

仕方なく彼女は蹲るようにして座り込んでいた長椅子の上から下りると、自室の扉を開けに行った。

「素直でよろしい」

「きやあつ……！」

扉を開けて現れた母の笑顔の後ろに立つ人物が目に入ったフォルセリー又は、小さく叫んで硬直する。

「……私は化け物か」

何故、彼までいるの？

自分に視線が止まったまま固まってしまった彼女に、リィンは小さく眉を顰める。

「相変わらずの被害妄想だな、ちょっと驚いているだけだろう」

「少しと言う程度じゃないだろう、側に寄る度にこれでは不自然過ぎるぞ。お前の案に乗るとは言ったが、これでは先が思いやられるな」

「大丈夫、大丈夫。端から見たらそれも微笑ましく見えるよ……何て似合いな二人だろうって」

二人の話題が自分のことであると言うのは分かるが、一体何を話しているのか分からない……何より、サスキアと話している間も自分に向けられたままのラインの視線の所為で、脳味噌が巧く働かない。

「どう考えても、誘拐犯と人質だろう」

「無粋なことを言うな。あんただって、ちょっとは努力してくれないと困るぞ……二人は愛し合っているんだからな」

母の言葉に、フォルセリーヌの止まっていた脳に衝撃が走る。

大事な話、愛し合う二人……。

「酷いわっ、お母様！ 私達を捨てるって言っのっ……？」

激情とともに言葉が口を吐く。

「はっ……？」

突然の非難に、サスキアは目を丸くする。

「彼が素敵なのは分かるけどっ……、今更駆け落ちなんて信じられない！」

酷過ぎるっ！ ……そう叫んで、フォルセリー又はすっかり泣き出してしまった。

「駆け落ち、……何か盛大に勘違いしていないか？」

大きな瞳からボロボロと大粒の涙を流して母を責める彼女に、リンはひくつと表情のない顔を歪める。

「とにかく、泣きやんで……フォル」

「いやっ、触らないで！ お母様なんて嫌いつ、見損なつたわ！ お父様が可哀想過ぎるっ……彼を愛しているなら何でお父様と結婚なんてしたのよ！ 私まで産んどいてっ、汚らわしい！」

伸ばされた手を弾きながら、フォルセリー又は恥じ入る様子もなく己を懐柔しようとする母を涙で濡れた双眸で睨みつけた。

「落ち着きなさい、フォル。私は駆け落ちもしなければ、アルフレインもお前もちゃんと愛してるよ」

「じゃあ何っ？ 不倫するつもりっ……貴方もよくそんなの承諾したわね！ プライドはないのっ、プライドは！」

「……っ……よくまあ、そこまで支離滅裂な誤解が出来るな」

突如、飛び火して来た非難の台詞に、リインは溜め息を吐く。

「悪い、リイン。純粋な子なんだよ……聞きなさい、フォル。リインと私は何でもないし、大事な話と言うのはリインとお前のことだよ」

サスキアは更なる非難の言葉を押し留めるように片手を上げ、真面目な顔をしてそう口を開いた。

「リインと婚約しなさい、フォルセリーヌ。これは母親の言葉ではなく、オルガウム国王妃としての命令です」

告げられた言葉にフォルセリーヌは、再び石化の魔法に掛かったかの如く息を吐くことさえ忘れてその場に立ち尽したのだった……。

「……周りの目が痛いわ」

「それはそうだろう、取り合わせが胡散臭過ぎる」

「やっぱり不自然よね、私達」

「自然に見えたければ、せめて笑え」

「……それは、貴方に言われたくないんだけど」

「否定はしないな……やはり、どう見ても誘拐犯と人質か」

「そこまでは言わないけど……私、何て呼んだらいい？」

「呼び捨てでいい」

「じゃあ、リン。しにが……じゃなかった、イシュトレイグの剣はどうしたの？」

「サエに預けた。お前のように敏い者がいれば、余計な騒動の火種になる」

「彼は剣にしかねないの？」

「いや、人型にもなれる」

「だったら、その姿で一緒にいてもらったらいいじゃないの」

「未婚の王女が侍女を下がらせて男二人と同席するなど、不自然どころの騒ぎじゃないだろう」

「……だって、落ち着かないんだもの」

王城クラウドス・ディアの中庭にある東屋で、テーブルを挟んで目の前に座る婚約者を前にフォルセリー又は溜め息を吐く。

母から、この婚約を知らされたのはついさきほどのこと。

偽装に過ぎないものの、リインがそれを受けたのは驚きだった。何の関係もなく、更にサスキアに想いを寄せている筈の彼が……。

リイン・ダグリードは漆国アイリスでも有数の侯爵家の次男で、サスキア王妃の遠縁に当たる。先の外交時にダグリード家現当主を訪れた際、出会ってその人柄を大いに気に入り、この婚約話が浮上した。

今回の訪問が何の前触れもなかった理由は、リインが所属する騎士団の帰還時期の不規則な外地任務に就いており、訪問時期を事前にはつきりと決めることが出来なかった為である。更に今回の帰国は一時的なものにしかあらず、近々再び任務に就くことになっており、これを逃せば今度はいつ任務を解かれるかも知れなかった為、運悪く国王が国外視察で不在の現在の訪問となってしまったのだ。

胡散臭いことこの上ない話ではあったが、王妃自らが城に招き入れ、その実に親しげな様子から周囲に言外の言質を与えた。

リイン自身もアイリスの剣と呼ばれる軍人家系の出に相応しく剣

で身を立てる者の空気をまとい、何よりサスキアに劣らず整った容姿がその出自を疑わせなかったし、違えた色彩と時を止めた容姿からかつてディゾ・リーリングと呼ばれた伝説の人物だと気付く者もいなかった。

肖像画の中の人物は人外存在でしかありえなかったが、目の前のリインは実に人間的だ。笑顔こそまだ見ていないが、表情は思ったよりも豊かだった。もともとそうだったのか長い隠遁生活がそうさせたのかは知らないが、血塗られた過去には甚だ不釣り合いに気も長いようで、話し掛ければ些細なことでも必ず返事を返してくれる。

フォルセリーヌが彼の正体を見抜けたのは、何かの間違いではないかと言っくらしいの稀有な奇跡なのだ。

「貴方、とっても普通の人だわ」

フォルセリーヌは、そう口に出して言ってみる。

想像の中のディゾ・リーリングと目の前のリインはまるで違うけれど、不思議と幻滅を感じることはなかった。

「……普通と言われたのは初めてだな」

彼は、僅かに瞠目して言う……気を悪くしただろうか？

「ごめんなさい」

「……何故、謝る？」

咄嗟に口を吐いて出た謝罪の言葉に、リインは眉根を寄せる。

「悪口に聞こえたかもって思って、私も平凡とか十人並みとかって言われるの嫌だし」

完璧過ぎる母と比べられることの多い自分にとって、「普通」と言う言葉はあまり良い意味は持っていなかった。

「サエは確かに平凡とは呼びがたいが……あれは別格だ。気にするだけ損だぞ」

「そんなこと言っただって、ずっと比べられてきたらそんな風に思えないわ……せめて、半分でもお母様に似たら良かったのに」

そうであつたら、少しは好きになつてもらえただろうか？

「それこそくだらん、似ているだけの模造品に何の価値がある」

「……本物じゃないと、意味ないのね」

やはり、リインの心に住めるのは母だけなのだ……。

「同席してよろしいですか、フォルセリーヌ姫」

胸の痛みを覚えて俯いた彼女の耳に、第三者の声が飛び込む。

「……ヘスター」

見上げたその目に入ってきた人物に、フォルセリー又は小さく眉を顰めた。

ヘスター・フル……代々オルガイムの審議院の議長を務めるフル家の一人息子であり、しつこく自身に求婚している男である。オルガイム上級貴族の証である銀髪は艶やかで、薄紫の瞳も宝石のようだった。なめした革の上着にはオルガイム特有の組紐の飾りがふんだんにあしらわれ、中に着た上質な絹のシャツも線の細い彼の肢体をびつたりと包み込んでいる……美しくあることのみが唯一の義務とでも言うような容姿とその装いには、これでもかと振り掛けられた甘ったるい香水でも消せない金の匂いが纏わりついていて、身じろぐ度に起こる絹擦れの音一つとってもフォルセリー又を苛立たせる。家柄以外に何一つ誇れるものがなく、父から与えられる権力に依存し切っている彼が、フォルセリー又は嫌いで堪らなかった。

「リイン、彼はヘスター・フル。お父上が、審議院の議長なの」

その顔を見ているのが嫌で、紹介する振りをしてフォルセリー又は視線をリインに移す。リインはヘスターに視線を残したまま、小さく頷いた。

「申し訳ないが、今は遠慮してもらいたい」

「何だつて……？」

甚だ癪に障る、見下すようなうすら笑いを浮かべていたヘスター

の顔が僅かに歪む。

「何の為に侍女まで下がらせていると思っている……遠路遙々やって来て、ようやく逢えた婚約者だ。邪魔されたくないのは、分かるだろう」

今まで人に命令したことがなく、かつ自分の要求がはね退けられると言う経験なぞ一度もなかったのだらう彼の何処か驚きを含んだ表情に、心底呆れたと言うような嘆息とともに、リインは言葉を吐き出す。

「私を誰だとっ……！ 父はっ……」

「審議院の議長だらう。さきほど聞いたばかりだ、まだ忘れるような年ではない」

己のものでもない威光を振り翳そうと口を開いたヘスターを、彼は興味もなさげに切って捨てる。

「姫っ……！」

「……ごきげんよう、ヘスター」

優雅さなどすっかりかなぐり捨てた淀んだ双眸を向けるヘスターに、フォルセリーヌも初めて彼に向って微笑んで暇を告げた。

「失礼っ……！」

無礼な彼を諷めるものと思っていた王女からの最後通告に、蠅人形のような青白い肌を怒りで赤く染めると、彼はそれだけ返して盛

大な絹鳴りとともに元来た方向にずんずんと去って行った。

「あれが例の……あの様子ではさつさと片が付きそうだな。しかし、いろんな馬鹿は見て来たが、あれほど救いようのない愚か者は初めて見たぞ」

「貴族や大臣達で残ってるのはカスばかりよ。本当の忠臣達は皆、先王様に殉死してしまったんだってお父様が言っていたわ……」

無然としたリインの言葉に、フォルセリーヌも溜め息を吐く。

「アイリスはどう？」

さきの戦争を生き延びた彼の目には、祖国はどう映っているのだろう。

「大した争いもなく、平和な方だろう……そう詳しい内情まで分かんが、王も善良で軍もしっかりしている」

「……貴方がそう言うなら、きっとそうなのでしょうね」

「あまり信用するな、政治に興味のない片田舎の人間の話だ」

リインは然したる感慨もなく言う。本当に興味がないようだった。戦争終結の影の立役者たる彼の二十年は、きっと蘇った特権階級の人間達が躍起になっていた領土回復、権力抗争と言ったくだらない争いとは全く無縁だったのだろう。

人の身に余りある力を得ながらも、それを私利私欲で行使することなく、祖国の片隅でただこの平穏が久しく続くことだけを願い、

静かに暮らしていた様がフォルセリー人には不思議なほどすんなりと感じとれた。

「要らないものが多過ぎるのよ、貴族達もこの王宮も」

フォルセリー又はまるで自分に言い聞かせるように呟く。

「城下の民達は、自分達が飢えないだけの物を持っていたらそれだけで十分なのよ……何故、それで満足している者達が卑下されないといけないのかが分からないわ。土を耕して、作物を育てるのは大変なことよ。一生懸命世話をして、身の丈に合った収穫を得ることに何が足りないの？ とても素晴らしいことだわ。それを知っているから、それ以上を望まないのよ。」

ヘスターはね、着飾って、手を打てばいつでもご馳走が運ばれてくるの。そんなだから何も分からないのよ、何でも欲しがるとのよ。お気に入りのムネジアの実が欲しければ、苗木から育てればいいわ。毎日水と一緒に魔道石を砕いて与えて、幹についた虫も一匹一匹取り除いて、花が開いたら雌花に雄花の花粉を付けて……三年間大事に大事に育てて一株あたり実るのは数個がいいところよ、それが何よっ……うちの果樹園で大変美味しく育ちましたから、貴女もどうぞって！ 鞭を振るって小作人に作らせた籠一杯のムネジアを、自分の手柄みたいな顔して持つてくるのが気に入らないのっ！ 食べ物でも花でも何でもいから、自分で作った物を一度でも持つてきたら、少しは見直してあげるわよっ……」

言いながら、いろいろ思い出したようでもどどん興奮して来た彼女は、最終的に頬を上気して吐き捨てる。

「……詳しいな」

リンのやや驚いたような言葉に、フォルセリー又はハツと我に返る。

「……っ、好きなのよ、庭いじり……ときどき、庭師に手伝わせてもらってるの」

お母様には言わないでよ……そう尻すばみに言っつて、彼女は肩を落とす。

きつとリンは呆れただろう。王女ともあろう者が何をやってい
るんだ、自覚がない……庭師に混ざって泥だらけになって花壇の植
え替えをしたり、声を上げて笑い合いながら木の実の収穫をしてい
たところを侍女に見つかる度、そんな非難の言葉を受けて来たのだ。

「ただのはねっ返りかと思っていたが、……見直した」

だから、次の言葉には本当に驚いた。

「ただ、ムネジアの木についた虫は全て取るな。セキロウだけ残し
ておけ、花粉を運ぶ他に悪さはしない……人の手で受粉させるのも
いいが、その方が花も傷まずに済む」

「えっ……？」

「アイリスの実家は花屋だ、実のなる木も扱っている……信用しろ」
そう告げた彼は、確かにフォルセリーヌに向けて微笑んでいた…
…。

……来たか。

深夜、密やかにノックされた扉に、リインは剣を携え音もなく立ち上がる。

問答無用で暴かれるかと思いきや、相手は思いのほか慎重だ。扉の外に感じる人の気には何の乱れも逸りもなく、見事に殺気を消している……彼は無意識に口許に笑みを刻んだ。

暗殺稼業を引退し、凶器としての剣を扱わなくなったからと言って、心まで脆弱になった訳ではない。命のやりとりまでは望まないが、腕のある相手に出会えば剣を合わせたいと言う欲求が自然と浮かんでくるのだ。

誰に憚る必要のない戦いを前にして、思わぬ手練を前に静かに闘志の火を灯しながら、ゆっくりと扉を開いた……。

「……っ、……！」

ただ、扉の向こうに佇んでいた人物を確認すると、反射的にその扉を閉めてしまう。

招かれざる客は予想外の対応に驚いたようで一瞬間を置いたが、再び少し強めに扉を叩いてくる。

リインはそんな深夜の訪問者に、ギリギリと奥歯を噛み締めたい衝動に駆られながら、要求に応えて扉を開けた。

「……何で閉めるんだ」

不満げな小さな声とともに、不測の人物はズカズカと部屋の中に入ってきた。

「どう考えても常識的な行動とは思えんからだ……真夜中に供も連れず王女の婚約者の部屋を訪れる王妃が何処にいるっ」

さつさと部屋中央の長椅子に沈み込むように座り込んだ彼女に、リインは苦虫を噛み潰したような不快感満載の口調で吐き捨てる。

「仕方ないだろう、政務でこの時間まで身体が空かないんだよ」

「お前が見咎められるようなへまをするとは思わんが……深夜に抜け出して、騒ぎにならないか？」

「アルフレインがいない時は寝室で眠ったことはないから、怪しまれることはないよ……一人だと分かると忍んで来る侍女が後を絶たなくて、いつも別の部屋に避難してるんだ」

昔から同性人氣が絶大だったサスキア、それは王妃となっても娘を産んでも衰えず、更に拍車が掛かっているらしい。

「無駄に女に親切だからだろ、改めるべきだ」

「そう言う環境に育って染みついているんだ、今更変えられないよ」

「アーケイデイスがそんなに慈悲深かったとは思えないがな……」

彼女の養父であった利己的な創造神を思い出し、リインは眉根を寄せる。

「あいつは関係ない。バイト先……いや、一時期勤めていた店の従業員に対する教育方針が徹底してたんだ」

「……地球界で何をやっていたんだ」

「ホスト倶楽部の警備員……簡単に言うと、男娼館で用心棒をしていた」

思いも寄らない経歴に、絶句する。

「何だその顔は……春をひさいでた訳じゃない、男娼館と言っても売春宿じゃないんだ。ご婦人方と話をしたり、酒を振る舞ったりする会員制倶楽部だよ。大体、警備員だから店の前に突っ立ってただけだしな」

「別に生活に困窮していた訳ではないだろう……何故、寄りによってそんな仕事を」

「反抗期だよ。政略結婚させられそうになってアーケイデイスとぶつかってた時期だったから、家に帰りたくなかったんだ。歓楽街をフラフラしてたら、そこ店の店長にスカウトされた。成人してなかったからホストとして雇えない代わりに、警備員のバイトをしてくれないかって……まあ、今考えると客寄せに使われてたんだろ」

「……お前の危機的状況に対する対応力の高さの理由が分かった気がする」

戦乱に巻き込まれる以前の波乱に富んだ過去の出来事を淡々と話すサスキアに、リインはしみじみと呟いた。

「私のことはいいよ、今日はどうだった。収穫はあったか？」

そんな彼に対し、彼女は尋ねる……目をキラキラと輝かせ、期待に満ち溢れた表情だ。

「ああ、フル家の馬鹿息子が早速やって来た。怒らせてやったから、近い内に動きがあるだろう」

「そうか、そうか。そっちは順調だな」

「……そっち？」

『サエは、フォルセリーヌのことを聞きたいのだよ』

訝るリインに、彼女が携えて来たイシュトレイグが口を開く。

「……話し辛いな」

彼の存在を一瞬忘れていたリインは、視線を傾けて面倒臭そうに言った。

『それでは、話し易くしょうか』

彼の苦言の意味を読み取って応えると、長剣は瞬時に人型を取る。穏やかに細められた双眸の白目と黒目は反転しており、胸元までの艶やかな髪は肌と身に付けた衣服と同様で雪のように白い……その場の誰よりも年若い容姿なのは、かつて神であつた彼がその中でも群を抜いて年若いからだろう。

「黒龍の姿しか見たことがなかったが、意外と若いな……」

『残念ながら、神としても精霊としても若輩者でね』

サスキアの言葉に、眉のないつるりとした眉間に小さく皺を寄せるイシュトレイグは、やや不本意そうに頷いた。

「で、王女について何を確認したい？」

自他ともに遍く過去に興味がないリインは、さつさと話を元に戻す。

「ああ、そうだな。あまり話し込んではお互い明日に差し支える。フォルセリーヌのことはどう思う、諸々の事情を抜きにした第三者の見立てを聞きたい」

「お前が育てたにしては、父親の放浪癖だけ遺伝したただのはねっ返りかと思っていたが……正直見直した。他者から教えられたものだけでなく、自ら行動して得た知識があり、それによって正しく判

断を下せている。まだ年若く青いが、いずれはお前のように良い統治者になるだろう」

怠惰な貴族の息子を切って捨てた汚れのないまっすぐな双眸を思い出しながら、彼は答えた。

「……、……何だ？」

隣り合って座るサスキアとイシュトレイグが示し合わせたように顔を見合わせ、楽しそうな笑みを浮かべるのに、リインは小さく眉を跳ね上げる。どうにも二人の微笑みが腹黒く感じられて、落ち着かない。

「本物にするつもりはないか？」

そんな彼に、含み笑いを浮かべたままのサスキアが投げ掛ける。

「……何を」

『貴方は、天然なのも大概にしなさい。まだ呆ける年には早過ぎる』

「喧嘩を売っているのか、お前は」

聞き流すにはあまりにもな台詞に、リインは苛立ちを表情に表す。

「もういいよ、イシュトレイグ……急かしても逆効果になるだけだ」

サスキアも嘆息する。理解していないのは自分だけのようだ……
答えを与えようとしない二人に、リインの苛立ちは募るばかりである。

「言い忘れていたが、今回の件の成功報酬は何でも望みのものをやるよ。ゆっくり考えてくれたらいい」

そして、次の言葉はすっかり別のものに移っていた。

「要らん……特段、足りないものはない」

遮ってまで追求するのも億劫で、リインは被りを振る。

「……あんたは難しく考え過ぎだ」

そんな自分の心を見透かしたように、彼女はいつかと同じ台詞を舌に乗せる。

「とにかく、期限は打たないからゆっくり考えたらいい……少し長居し過ぎた」

言いたいことは全て言ったとばかりに、サスキアは身体を沈み込ませていた長椅子から立ち上がる。

『ここに来る前、私が言った言葉も思い出してみるといい』

元の長剣の姿に戻り、彼女に携えられた彼は最後にそう口を開いた。

「……満足のいく答えが出るよう祈ってるよ、誰にとってもね」

立ち上がり掛けた彼を制してそう微笑むと、サスキアは来た時のように完全に気配を絶って扉から出て行った。

「何も求めていないんだがな……本当に」

閉め切ったカーテンの隙間から差し込む霞がかった白銀の光に眉を顰めながら、リインは呟く。

正直、何よりも欲しているものはあったが、それは誰彼他人に与えられる代物ではない……生きる目的なぞ、自分で見つけるしかない。

たなびくように緩々と伸びゆく朝まだ遠い光は誰かを思い起こさせたが、緩やかに変化を遂げ始めた自身の心内に彼が気付くことはなかった。

「……おい、そんなところから一体何処に行くつもりだ？」

窓枠に足を掛けた婚約者（偽装）に、リインは呆れたように声を掛ける。

「……えっ、……きゃあっ……！」

「よほど落ちるのが好きらしいな」

突如掛けられた声に体勢を崩して傾いだフォルセリーヌの身体を、リインは溜め息を吐きながら抱き止める……王城クラウド・ディアの中庭に続く窓で、ここは四階だ。王女の自室からは随分離れており、人通りも少ない。

「……急に声掛けるからでしょ……貴方こそ、何でこんなところにいるのよ」

「婚約者を訪ねようとしたら、当の本人が侍女の目を盗んで抜け出しているところに出くわした」

いわゆるお姫様だっこの状態で平然と話を進める彼に、吐息さえ感じる距離感やら言い訳の出来ない状況を押さえられたバツの悪さやらでフォルセリーヌは顔を赤く染める。

「行きたいところがあるなら、言え」

「……え？」

てつきり諫められると思っていたところのこの誘い文句、フォルセリー又は驚いて目を見開いた。

「城の中では、相手も動き難いだろう。サエの許可は得ている」

「……ああ、そう言うこと」

続けられた言葉に合点がいく。通常なら到底許されない外出も、婚約者と言う名目のリインと一緒に全く問題はない……偽装婚約者殿は国王夫妻に勝るとも劣らない剣の使い手なのだ。漆国アイリスのダグリード家当主の剣技は有名だが、今の今までその陰に隠れていた弟の腕前は知られていない。どうぞ襲って下さいと言いながら歩いているようなものだ。

「で、何処へ行こうとしていたんだ」

「……クラウディアだけだ」

そこは二人の出逢いの地、リインは僅かに眉を跳ね上げる。

「遠いな」

「え、前は一瞬だったじゃない？」

「力を使えば、警戒される」

彼は少し考えるように視線を窓の外に逸らした。

「ごめんなさい、別のところで……」

「馬でも借りるか」

困らせるのは本意ではないので、口を開き掛けたフォルセリーヌに、リインは再び視線を戻す。

「馬には乗れるか？」

「……残念だけど無理、乗馬はお父様が許してくれなかったもの」

フォルセリーヌは、過保護な父親を思っ眉根に皺を寄せ、頭を振る。

「なら相乗りだな、レジストールは持っているな？　それで時間短縮出来る」

「……え、ええ」

「なら、決まりだな」

相乗りと言う単語に動揺しつつも首肯するフォルセリーヌに小さく笑うと、リインはそう言っ彼女の身体を床に下ろす。

「……何だ？」

向けられた二度目の微笑みに呆然とする彼女に、リインは不可解そうに問い掛ける。

「何でもないわよ……急に笑うから、ちょっとびっくりしただけ」

「私は化け物か……お前達親子は、本当につ……」

やや頬を染めたフォルセリーヌの思い掛けない告白……彼は一瞬驚いたような顔をした後に、うんざりだと言うような溜め息を吐いた。

「そう言う意味じゃないわ、貴方が普通の人だってことはもう分かっているもの……ただ、私といういつも不機嫌そうだから」

仕方ないけどね……そう口にした彼女は少し寂しそうな様相を見せる。

「……そう言うつもりはないが」

フォルセリーヌに対する認識を改める前までは偽装婚約の申し出を承諾したものの、全く乗り気ではなかった。

しかし現在、リインは別段不機嫌にしているつもりはない。王女の婚約者と言うことであからさまな周囲の好奇の目に晒されるのは相変わらず気分の良いものではなかったが、それも彼女の所為ではないのだから。

「この茶番劇で我慢を強いられているのは、お前の方だろう」

自分がふざけていると思うように、フォルセリーヌとて偽装婚約は嫌だろうに……まだ少女と呼べる彼女に、陰謀や権力抗争と言った爛れ切った大人の世界は早過ぎる。王女に生まれたが為にその身

を危険に晒し、様々な制約に縛られて、世間一般の娘より一足先に大人にならなければいけなかった運命を不憫だと思う。

サスキアのように特殊な環境で育った訳ではない。貴族と言う名のそれこそ化け物達が跋扈する王宮で暮らすフォルセリー又は、それなのにまっすぐに真つ当な価値観を持って育ったことは称賛に値する。

「……私は、この状況が嫌だと思ったことはないわ」

まっすぐに自身を見据えて言い切った彼女の双眸には、何の嘘偽りも見えない。強い決意を、その心に刻んだ者の見せる表情だ。

「行きましょう」

微笑みを浮かべて、フォルセリー又はラインに片手を差し出す……その示す意味は。

「……、……人浚いと人質」

「そーゆー乙女心をぶち壊すようなこと言わない!」

眉間に微細な皺を寄せてうつかり零れ落ちた言葉に、彼女は頬を膨らましながら強引にラインの手を引いた。

「お手をどうぞ、姫君……とか言えないの、貴方?」

「我が俤言つな、そう言うことはサエの方が似合いだ」

ムツとした表情で見上げるフォルセリー又は、ラインは溜め息交

じりに言った。

「悔しいけど否定出来ないわね、喜んでやってくれそうだし……母娘で何て不毛なのかしら」

フォルセリーヌも嘆息する……けれど、頭一つ半の身長差から歩き辛そうにしながらも、その手を振り解かれなかったことに小さな喜びを感じていた。

王城クラウドス・ディアの厩舎長は、好々爺然とした風貌の老人だった。乗馬を禁止された王女とは随分と親しげな様子だったが、それはその筈……彼は城の庭師も兼任していたのだ。口には出さないが、フォルセリーヌを実の孫のように愛していることが全身から伝わって来た。

婚約者であると言う触れ込みのラインに対しても人好きのする笑みを向けながら、その実、目だけは鷹のように鋭い。かつては、一角の人物であつたろうことはその眼光の強さより知れた。

「婚約者殿、くれぐれも姫様をよろしく」

馬上でフォルセリーヌを腕に抱くラインへ、言葉とともに首を垂れたその瞬間の一瞥は喉元に剣を突き付けられたように厳しい。向けられた本人のみにしか分からない無礼も甚だしい態度に、逆に安心した……城内にも、性根の腐った者ばかりではないらしい。王女に乞われたとは言え、庭いじりまでさせてしまうこの老人、庶民の出らしいがなかなかの気骨の持ち主である。

「心得ている……害する者は全て潰す」

返事としてはいささか過激だったかもしれないが、顔を上げた厩舎長は至極満足げで意図したところは伝わったようだった。サスキアのお墨付きだけが証明するリインの実力についても、この短いやりとりから察したのだろう。

「姫様、良うございました……この方は本物ですな」

フォルセリーヌの方に向き直った彼は、愛情溢れた笑みを向ける。リインからはつむじしか見えなかったが、嬉しそうに微笑んだ様相は想像出来た。

「……行くぞ」

葦毛の腹を蹴ってやると、馬は待ちかねたように駆け出す。

いつも不機嫌そうだとフォルセリーヌは言った……けれど、リインとてその笑顔を見たのはさきほどが初めてだ。零れ落ちた言葉は照れ隠しだったのだろうか、自分は確かにその微笑みに見惚れていた。

この関係の終焉は近い……ホツとする想いと同時に、今少し……そう願ってしまうのは何故だろうか？

先の戦乱でその機能を止め、浮力を失った飛行帝国クラウドディア跡地は現在、かつて砂漠だった場所にあった。鬱蒼と緑が生い茂り、その昔渴いて砂に塗れていた空気の中にもしつとりと水分を含み、暫く馬を走らせただけで外套が湿って重く感じられた。砂漠から密林に姿を変えたキルギス……そこは亜熱帯植物の坩堝である。

僅かな魔力と、生命力に満ち満ちた木々や植物はここでしか見られないもの。大振りの毒々しい深紅の花は薄い霧状の水蒸気のような胞子を飛ばし、釣鐘のように頭を擡げる半透明な花弁を持つそれは微かに発光して周囲を照らす。そして、風もないのに巨木の幹を蛇のように蛇行して互いに絡まり合う蔓草……そのどれもが、この先に進むなと警告を発しているようだ。

禁域に定められたのは、ただ一人残されたクラウドディア皇女フェダへのサスキアの心配りであり、形式的なもので植物にも何ら毒性はない。

それでも、クラウドディア皇帝の無念が乗り移ったのか狂ったような生態系が怪異を感じさせる。それらの動的な植物は、禁を犯した者のなれの果てなのだ……そんな噂がエリアスルートには蔓延し、まともな神経の者ならばおよそ近付かない場所となっていた。

何より、今更あの凄惨な戦いの悪夢を見たくはないと言うのが現実である。

動く蔓草に戒められ、錆び付いた門扉の前で、リンとフォルセリー又は馬から降りた。

「この前は、どうやって入った？」

「上に向かつてる蔓草に引っ張り上げてもらったわ」

戦乱を経験していないからだろうか、フォルセリーヌからはかなり豪胆な返事が返る。

「貴方はどうやって入ったの？」

「イシュトレイグの力で素通りだ」

蔓草の強度を確認しながら、リインはさらりと答えた。

「便利ね……今回はどうするつもり？ 彼、一緒じゃないわよ。多分、重量は私がギリギリだったわ」

「……あいつがいなければ何も出来ない訳じゃない」

リインはその背に帯びていた借り物の長剣を固定するベルトを外し、柄に入ったそのまま地面に突き立てた。柄の部分に足を掛けると、絶妙なバランス感覚で門扉の頂点にその手を掛け、一気にその上に登ってしまう。

「お前も早く上がって来い」

ベルトを掴んで長剣を引き上げながら、リインは呆気にとられているフォルセリーヌにそう促した。

遺跡内に入れば、植物の量は変わらないが、その種類が全く異なっていた。まるで天蓋のように空を小さく見せる蔓草達が壁の役割を果たすのか、湿気は少なくなり、豊かな生態系は自然のものと大差ない。

「お前が落ちて来たところに行ってみるか」

「……何それ、当てつけ？」

ラインの言葉にフォルセリー又は小さく眉を顰めるが、歩き出した彼の後に素直に続いた。

蔓草に覆われた五階建ての吹き抜けになった建造物がかつて何の役割を果たしていたか今となっては知るよしもないが、三階部分の空中に迫り出した……多分バルコニーであつただろう手摺りを欠いた一角に、ラインは片膝を突く。

「どうしたの？」

「……ここには何度か来ているか？」

フォルセリー又の呼び掛けに、ラインは振り返らずに返事ではない問いを返した。

「ええ、ここに腰掛けて景色を見るのが好きなの。屋根の上まで登った後にいつも来るんだけど、あの日はたまたま貴方が立っているのが見えて……言い訳に聞こえるかもしれないけど、それくらいで落ちるなんていつもなら考えられないのよ」

「……そうだろう」

頷くリインの声は酷く硬くなっていた。

「リイン？」

「人の手で細工した跡がある」

様子のおかしくなった彼に呼び掛けると、予想もつかない言葉が返る。

「……っ……それって、……どう言うこと？」

「どうしてもお前に死んで欲しいと思っている人間がいると言うことだ。どこでどうことを運べば確かかつ後で露呈もしないように実行出来るか……お前の行動をつぶさに監視していたのだろう」

リインの言葉に、フォルセリー又は蒼褪める。あの時、この場所で……もし彼がいなければ、自分は命を落としていたのだ。

「素晴らしい！　まさにその通りだ」

音をなくした空間に、不釣り合いな明るい声とその主による拍手

が響き渡る。

「来たな、フル家の馬鹿息子」

「……っ……、本当に口の利き方を知らない男だ」

想定範囲内と言った様相で振り返ったリインが零した言葉に、綺麗な面立ちが醜く歪む。彼の後ろには、金にあかせて集めたであろう揃って性質の悪そうな十数人からの男……その手には抜き身の剣が握られていた。

「ヘスター……貴方が、本当に？」

顔を見るのも嫌だと思っているのはお互い様……それでも、仮にも自分に求婚していた男。自分に向けられた紛れもない殺意に、身体が小刻みに震え出すのを止められなかった。

「お前のような傷物に、この私が本気で求婚すると思ったか？」

取るに足らない男の言葉が、鋭利な刃となって心に突き刺さる。

僅かに傾いだ身体を、リインがその腕で抱きとめた……虚ろに見上げた先には、一度も見たことのない顔。

「持っている、もう必要ない」

馬を駆る時に利用した加速装置であるレジストールを通した組紐を腕から外し、フォルセリーヌに返したリインの感情を抑えた声は常以上に低く、向けられた双眸の奥には鋭利な闇が渦巻いている。

「……どう、するつもりなの？」

さきほどの衝撃は霞み、心は目の前のリインに対して警鐘を鳴らし始めた…… フォルセリー又は恐怖を宿した声音で尋ねる。

「暫く目を瞑っている、この先は……お前は見ない方がいい」

「はっ、ここから生きて帰る気か？ 階段はこちらにしかないぞ、お前も王女も飛ぶことは出来ないだろう！」

リインの言葉に、ヘスターがさも愉快そうに声を上げて笑った。

「そんなものは関係ない、死神の前にはな。……我が手に戻れ、イシュトレイグ！」

人の気を消し去ったリインは、虚空に手を伸ばして彼の者の名を舌に乗せる。

ドクンッ……

空気が脈打つ……全身が泡立つようなその感覚に、彼以外の者は得体の知れない重圧に身体が竦む。

煌々と光の差し込む視界で、陽炎のように揺らぐその姿……彼を中心に溢れ出す闇。

『仰せのままに』

伸ばした腕の先、空間を切り裂くように現れた禍々しき長剣はその意思を声に乗せた。

「まさかつ、嘘だ……そんな筈はっ……！」

信じられない情景……さきほどまでの威勢がなりを潜めた上擦った声で、ヘスターが叫ぶ。

「待てっ……お前達！」

「うるせえっ、付き合ってられっか！」

「金の問題じゃねえんだよ！」

「死にてえなら、てめえ一人で死にやがれ！」

統率を失った集団に飛んだヘスターの叱責も、ディゾ・リーリングを前には何の抑止力にもなり得なかった。競うように階下に駆け降りる者、翼を使って窓から飛び立つ者……あっという間に、彼は一人その場に取り残される。

「……お前は、簡単に死ねると思うな」

「ひいっ……！」

鼻先に突き付けられた死神の剣に、ヘスターは金切り声を上げてその場に尻餅を突く。圧倒的な恐怖心に、足に力が入らない。

「助っ……た、助けっ……！」

「自由の利かぬ幼子の翼を奪っておいで、お前は無様に命乞いかっ……」

縛れる舌が必死に紡いだ音は、更にディゾの怒りを煽る。

「私じゃないっ！ それは父がつ……！」

振り上げられた死神の剣……ヘスターは、血を吐くような絶叫を上げた。

エリアスルートには、死神に殺された者の魂には永遠に安息が訪れない……そんな言い伝えがあった。

破壊神である死神、神である彼の者達にもそれぞれ等級がある。

最古の創造神であり万物の父神アーケイデイスが生み出した死神は五神、最高位の称号は白、以下に黒、緋、蒼、紫とあった。

年功序列でない死神の頂点に立つのは、最後に生み出された白き死神イシュトレイグである。漆黒の龍の身体は一見して黒位かに思われたが、その瞳のない双眸の白い輝きでもって白位と知る。

先の戦乱後に明かされたその存在。彼が守護し、その称号を貸し与えたただ一人の人間ディゾ・リーリングを、この二十年間、イシュトレイグが神格を失ったことを知らない世の権力者達は秘密裏に……それでも血眼になって探していた。

神の守護する人間が蘇っている。

神の力を御する人間を得た者が、エリアスルートを制するのだ。

濁った欲望は留まることを知らなかった。

この身体は確かに老いぬかもしれない、死なぬかも知れない。精霊に身を堕としたと言えど、イシュトレイグの力はいまだ地上の何者をも凌ぐだろう。

だが、破壊の力の行使の先に待つのは破滅だけ……凄惨な後悔し
が残らない。

死神に殺された者に安息が訪れないのではない、無限の闇に墮ち
るのはその力を行使した者の方だ。

かつて垣間見たとこしえの闇の住処から、幸いにも引き返すこと
が出来た。もう二度と戻りたいとは思わない。

だから、封印した。

……けれど。

もう、どうでもいい。

冥府だろうがその先のとこしえの闇だろうが、行ってやろう。

この救いようのない矮小な男は、ただその息の根を止めるだけで
は足りない。

かつて彼女が覚えたと遜色ない恐怖を、死神の姿をその目に焼き
付けて逝くがいい。

イシュトレイグの剣を振り降ろすことに、何の躊躇いも感じられなかった。

「駄目っ……！」

ただ、自分と失神せんばかりに委縮し切ったヘスターの間に割り込んだ存在に、その凶刃は寸でのところで静止する。

「……駄目よ、リン」

両手を大きく広げ、何の価値もない人間を全身で庇うフォルセリ
ーヌ……彼女はレジスツールの力を使い、瞬時の内に二人の間に割
って入ったのだ。

「どけっ、……見たくないなら、目を背けている」

何故邪魔をするのか……彼女の存在によって出口を失った殺意が、
彼を苛立たせる。

「嫌よ、どかない！ 彼なんかの為に、その手を汚しては駄目っ……
…お母様とも約束したじゃない、過去を暴くって！」

「生きている必要はない。脳さえ残っていれば、記憶は取り出せる」

闇と血に違えた双眸は殺意に駆られ、もはや人の気ではなかった。

「貴方はリンよ、もうデイズ・リーリングじゃないの！」

広げた腕を彼に伸ばし、フォルセリーヌは狂気に塗れたその首を強く引き寄せる。

彼女を傷付けぬよう、咄嗟に剣を引く……隙を突いて重ねられた唇、驚愕でその手を滑り落ちるイシュトレイグの剣。

「初めて肖像画を見た時から、ずっと貴方が好きだったの」

さきほどまで一つになっていた唇が、真摯な声音で紡ぎ出す想い。

身の中で暴れ回っていたどす黒い感情が急激にその勢いを失っていく、熱の引いた視界……目の端に映る髪は本来の自分の色。

「実際に貴方に会って、自分の気持ちは本物だっと思った。でも、それはさっきの貴方じゃない……本当の貴方、私は普通の人間のリン・フォルラーツが好き」

「……フォルセリーヌ」

かつての自分を目の当たりにしながら、何の躊躇いもなく普通だと言った彼女……耳の内側から鳴るような鼓動は、もう聞こえない。

「落ち着いた？」

「……ああ、悪かった」

長い息を一つ吐き出すと、リインは幾分落ち着いた声音で答えた。

「良かった」

フォルセリーヌもホッとしたように微笑む。

「どいてくれ、そいつを放っては置けない」

それでも、彼女の後ろで、激しい緊張感から随分前に失神していたヘスターに視線を送りながら再度口を開く。

「……危ないこと考えてない？」

「ああ、その気は失せた」

一瞬探るような視線を送って来たフォルセリーヌだったが、憑き物が取れたようなさっぱりした表情に安心したようで、彼の後ろに戻った。

無様に崩れ落ちている身体の前に、リインはイシュトレイグの剣をその手に膝を突く。まず前髪を掴んで頭を持ち上げると、蟹のように泡を吹いている面相に不快そうに眉を顰めながらも、顔面の上

半分を右手で鷺掴んだ。

暫くすると指の隙間から白い煙が立ち昇り、脱力していた身体がピクリと痙攣する。

「……大丈夫なの？」

「ああ、もう終わった」

問い掛けに頷いてリインがその手を離すと、ヘスターの身体は再びその場に崩れ落ちる。特段、以前と変わりはない。

「それは？」

リインの右掌の上で、直前まで持っていなかった筈の赤黒い球が白い煙を上げていた。

「奴の記憶の結晶……十六年前の誘拐事件の顛末から、フル家の全ての悪事が収められている」

「それもイシュトレイグの力？」

『破壊神としてのものではなく、精霊としての力だ』

その問い掛けには、リインの手に行っている彼が答える。

「言葉を交わすのは、初めてね」

『貴女には自己紹介が不要だったからね、王女』

「……話し辛い」

剣の状態のイシュトレイグを覗き込むようにして言うフォルセリ
「次に、リインが再び口を開く。」

『仰せのままに』

いつものようにリインの苦言の意味を汲み取った彼は、人型を取った……ただ、いつもと違うのは何故かその姿が半透明の陽炎のような存在だと言うこと。

「どうした？」

その希薄な輪郭を訝り、リインは疑問を口にする。

『貴方には黙っていたが、バリユファスとの制約は期限付きだったのだよ』

「……何？」

『貴方に、私はもう必要ない』

イシュトレイグの言葉に、彼は眉根を跳ね上げる。

『目的は見つかった筈だ』

「……それは」

『貴方も気付いているだろう、時は動き出している』

躊躇いの色が過ったラインの双眸を、白黒が反転した双眸はまっすぐに見据えて言った。

『答えは貴方の隣にいる』

ラインは、隣に立つフォルセリーヌを見やる。

『恋でもすれば、世界も変わるだろう』

唐突に思い出される、彼の言葉……。

「……世話になったな」

言いたいことは山ほどあったが、結局のところ口を突いて出たのはそんな言葉だった。

『……王女、ラインを頼む』

満足そうに微笑むと、イシュトレイグは黙って二人のやり取りを聞いていたフォルセリーヌにそう言葉を送る。

「……えっ、私？」

急に話を振られたフォルセリーヌは、意味も良く咀嚼出来ずに瞠

目した。

『貴女なら、私では与えられなかったものも与えられる』

「……とてもそうは思えないんだけど」

フォルセリー又はリインを見やるも、彼は何か考え込むような顔つきをしているだけで何も答えてはくれない。

『いい加減、腹を括りなさい。成功報酬は望みのものを、と言っの
はそう言う意味だ』

「もう分かった、何度も言うな……お前らの手の内で踊らされたよ
うなのが気に食わないだけだ」

『選んだのは貴方だ』

「ああ、その通りだ。だからこそ余計に腹が立つ……もう、そろそ
ろ行ったらどうだ」

穏やかに微笑むイシュトレイグの顔を、リインは忌々しげに睨み
付ける。

『ああ、もう二度と会わないことを祈っている……次に会うとした
ら、それこそ本当に世界の終焉だろうから』

何気にとんでもないことを口にしながら、笑みを浮かべたままの
彼の輪郭は完全にその形を失う……あまりにも呆気ない別離。

「……行っちゃったわよ？」

「そうだな。最後まで一言多い奴だった」

大きな溜め息を吐き出すと、リインはゆっくりとフォルセリーヌを見やる。イシュトレイグとの制約は完全に解かれ、真正正銘ただの人となった自分……何も変わらないと思っていたのに、鼓動を刻む世界はここまで鮮やかだ。

その彩りの集大成は、他でもない目の前にいるこの少女である。

彼の長い視線に、フォルセリーヌは僅かに頬を染める。さきほど思い切った行為に出た人物とは思えない反応だ。

「……何よ」

不満そうに声を上げる。無意識に笑みが零れていたらしく、彼女の機嫌を損ねてしまったようだ。

「サエからは、今回の成功報酬を約束されていた……何でも望みのものを、と言うことだ」

「ええ、当然よね。何か欲しいものでも？ 貴方の肖像画を外してもらうとか？」

フォルセリーヌの的外れな返答に、小さく噴き出してしまう。

「それもいいが……一緒に来い」

「……何処に？」

「漆国アイリス、庭いじりが好きなんだろう？」

動きが止まる……さすがに、リインの意図するところを理解したようだ。

「……嘘」

「こんな盛大な嘘を吐く体力はないぞ」

吐息のように漏らした言葉に、リインは至極真面目な顔で言う。
まっすぐに注がれる双眸に嘘は見当たらないのだが……。

「……だって、お母様がっ！」

彼のサスキアへの過去の想いを知っているだけにそう易々とは信じられないのだ。フォルセリーヌも別にその告白を打ち消したい訳ではない……ただ、自分と母は、あまりにも違い過ぎる。

「何十年前の話を引っ張り出すつもりだ……今更だ、他人のものに興味はない」

「……夢、とか？」

「……お前な、いい加減にしるよ」

今度は頬を抓り始めた彼女に、次第にリインも焦れてくる。

「そんなっ……簡単に信じられる訳ないでしょ！」

「だったら、信じられるようにしてやろうか？」

「えっ……、……っ……！」

言葉とともに引き寄せられた身体、目の前に迫った漆黒の瞳に思わず目を閉じたら唇に感じる温かい感触……さきほど自分が仕掛けたものより、遥かに濃厚なそれ。

フォルセリー又は、その場にペタンと座り込んでしまった。沸騰しそうなほど、顔が熱い。

「……今なら空、飛べそうな気がする」

「飛ばなくていい、ずっと側にいろ」

人生初の腰砕け、傍らには煽るような微笑みを浮かべる想い人……熱はまだまだ冷めそうになかった。

いつも通りの平和な晴れの日、翔国オルガウムが王城クラウド・ディアでは一つの騒動が起こり、それに付随して、とある過去の罪が裁かれた。

「……これは、これは、サスキア王妃。斯様なところに、如何なされましたかな？」

厩舎に現れた彼女に、厩舎長は常と変らぬ好々爺の笑みで出迎える。

「あまりの忙しさでな……逃げて来た。ちょっと匿ってくれるか」

階級章のない一介の騎士団員の制服を着たサスキアは、厩の柵に上半身を預け、大きな溜め息を吐く。

「承知致しました。王妃様お一人では、さすがに裁き切れませなんだか」

城内を騒然とさせた騒動……審議院が議長のバルサ・フルの失脚。十四年前の王女フォルセリーヌの誘拐及び、審議院の運営資金の横領……その他大小の余罪により、爵位剥奪の上、一族の国外追放。追放時、彼らの翼は永遠に失われた。他、審議院内で右に倣っていた議員達も総じて罷免。第三機関である審議院は、完全にその機能を止めた。

「早馬を飛ばしたが、一体いつ帰って来るか」

眉間に皺を寄せたサスキアの心情を察してか、柵の内側から栗毛の牝馬は甘えるようにその鼻先を寄せて来る……彼女は愛馬の労いに淡く微笑んで、その滑らかな毛並みをかいてやった。

「そうでございますな、ミロードでしたら往復で一週間でしょうか……しかし、今回は事態が事態、半分に短縮されるかもしれません」

「だと良いが……ライブルグ、暫く荒れるぞ。この国は」

この容赦のない粛清は、他の貴族達の間にも波紋を広げていた。王家に次ぐ名家フル家の没落に、後釜を狙う者達は早くも出て来ている。ただ、その野心に見合う実力を持った者などほとんどいない。微温湯に首まで浸かり切った彼らは、フル家同様に楽をして私腹を肥やしたいだけ……サスキアが再構築したいと願っている審議院なぞ任せられる訳がない。

「痛みを伴いますが、溜まった膿を出すことは必要なことです。貴女様のされたこと、間違っではおりません」

自身をまっすぐに見つめる老人の深い叡智を秘めた双眸に、サスキアは姿勢を正して向き直る。

「ライブルグ、貴方が議長になってはくれないだろうか？」

そして、そう切り出す。

「王妃様……ただの庶民の年寄りの肩書をこれ以上増やさないで頂きたい。もう、とうに隠居の年にございますぞ」

まっすぐな視線を受けた厩舎長ライブルグは人の好い目を更に細め、ゆっくりと頭を振った。

「なら、息子を貰いたい。確か騎士団に所属していただろう……腕

はそれほどでもなかったが、他にやりたいことがある様子だった」

「……そちらが、本当の目的でしたかな？」

「貴族だけの政なんて旧体制にもほどがあると思わないか。貴方の息子はその道さえ与えれば、きっと良い政治家になる」

サスキアは、それは美しい微笑みを見せる。

「あれは、まだまだ未熟で血の気の多い男です」

「だが、打たれ強いし、努力することを知っている。欲しいのは、己の為ではなく民の為に働ける人間だ」

「……決めるのは、ブライスです」

暫くその微笑みを見つめていたライブルグだったが、一つ長い吐息を吐いて、そう言った。

「有難う、絶対に口説き落としてみせるよ」

「王妃様には敵いませんな」

力強い言葉に、厩舎長はまた一つ溜め息を吐く。

「私の力なんて大したものじゃない。……それより、一頭減ってしまったな。賄賂と言う訳ではないが、増やすか？」

「ヒルガは、ほんに良い馬でございました……オルガウムではなかなか見ぬ葦毛で、強脚な上に主に忠実」

「そう恨めしそうに言わないでくれないか、唯一受け取ってもらえた嫁入り道具なんだから」

じつとりと湿り気を帯び始めた彼の口調に、サスキアは苦笑する。

審議院崩壊の一つ手前の騒動……限りなく駆け落ちに近い、王女フォルセリーヌの漆国アイリスへの輿入れ。ダグリード家の二男は逃げるように彼女を連れ去り、婚礼の儀式は省く、不在だった国王から直接の承諾も受けていない。当然、重臣達はこの無礼に激昂し、漆国アイリスの翔国オルガムに対する宣戦布告で、王女は人質として連れ去られたのだと言う憶測まで飛び交い、話は一時限りなく大きくなった。

鬼の首をとったかの勢いで兵を上げるべきだと捲し立てて来たのは、サスキアの予想通り審議院議長バルサ・フル……その鼻先に突き付けてやった王女誘拐事件の首謀者がフル家であったとの動かぬ証拠。王女とその婚約者を亡き者にしようとならず者を雇って襲って来たヘスターも既に投獄、彼の脳から取り出した記憶の球の鑑定も正当なるものと魔術師より報告書を提出させていた。

王女の急な漆国アイリス入りは、その身の危険を感じた王妃の緊急の指示と言うことで一応の片を付けた。ダグリード家にも口裏を合わせてもらうように、連絡済みだ。

「姫様がお幸せそうだったのが、唯一の救いでございます……やはり、あのお方は本物でしたな」

「ああ、何とも似合いの二人だろう」

人を見る目は確かなライブルグの言葉に、サスキアは微笑む。

「お寂しくなりますな」

「あの子の幸せの為だ、仕方ないよ」

正直、こんなにも早く二人が心を通わすとは思っていなかったけれど、きっとあの子を名付けた時から縁が生まれていたのだろう。

名付け親になって欲しいと言うアルフレインとサスキアの依頼を、リインは断って来た。ならば、と名付けたのがフォルセリー又と言う名……幸多き美しい人生を願って。

花の名を冠した二人は、きつと誰もが羨む幸多き美しい夫婦となるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7575l/>

死神と姫君

2011年2月18日14時02分発行